

論文要旨

本論文の目的は、他者理解における自閉症児の特異性について、「心の理論」課題を用いて情動的・認知的側面から検討し、他者理解の発達が生じる自己理解に与える影響に関する発達の様相を明らかにすることである。本論文は6章から構成される。

第1章ではまず自閉症スペクトラム障害 (autism spectrum disorders) の原因論の変遷を概観し、自閉症の生物学的な要因を解明しようと遺伝子や脳画像研究が進む中で、自閉症に関して心理学的理論から研究する意義を示した。その上で、臨床場面から生じた筆者の2つのクリニカルクエッション「自閉症児と定型発達児は他者の心を推測する際に、異なる方略を用いるのではないか」「自閉症児の自己はどのような発達を示すのか、またそこに他者理解における特異性が影響を及ぼすのか」を明示した。

第2章では、他者の心の理解について、定型発達児における「心の理論」研究を概観した上で、“自閉症=心の理論欠如”仮説に関する知見を整理した。そして、「心の理論」欠如仮説の問題点から見えてきた課題と研究意義を明らかにし、自閉症児の情動的・認知的な心の理解を検討するために、【研究1】自閉症児の心の理論は定型発達児と異なるのか【研究2】情動的な心の理解として、自閉症児には直観的心理化は見られるのか、【研究3】認知的な心の理解として、自閉症児は自己中心的な見方をする傾向があるのかという3つの研究目的を提示した。

第3章の第1節【研究1】では、定型発達の幼児と小学生の自閉症児を対象に、誤った信念課題を実施し、“自閉症児は定型発達児と異なる心の理論を持つのか”について検証した。その結果、誤った信念に正答する際に、定型発達児には、誤った信念の理由付けはできないが直観的に行動の選択はできる水準1と、言語による理由付けも可能となる水準2がともに存在したが、自閉症児は水準1が見られず、水準2のみであった。このことから、自閉症児は他者を理解する際に、言語能力に依拠して命題的に理解していくという特異性が示唆された。第2節【研究2】では、定型発達児と自閉症児の小学生を対象に、“他者の予期せぬ行動に対して、自閉症児には直観的心理化を示す情動反応が見られないだろう”という仮説を検証した。その結果、自閉症児にも半数以上に情動反応が見られ、直観的心理化を有していることが示された。しかし、予期せぬ行動に対して、定型発達児は「驚き」や「戸惑い」といった情動反応を示したが、自閉症児は、高学年以降に「嫌悪」反応を示すものや無反応となるものが増加した。つまり、自閉症児は直観的心理化を行なうが、それは定型発達と同質のものではなく、社会的刺激に適切に反応できる定位閾が狭いことによって、柔軟性の乏しい反応として表れると考えられる。第3節【研究3】では、定型発達児と自閉症児の小学生を対象に、“他者の意図を推測する際に、自閉症児は自己中心的な見方でとらえる傾向がある”という仮説を検証した。その結果、定型発達児は、自己中心的な見方と他者中心的な見方を相互に活用しているのに対して、自閉症児は高学年であっても、自己中心的な見方にとどまってしまうことが明らかになった。自閉症児は、社会的刺激から焦点を絞り込むことによって認知を成立させるという特徴があり、この単焦点という過剰選択性により、日常生活といった刺激にあふれた統制の緩い環境下では、他者からの社会的刺激に自発的に注意を向けていく傾向が乏しいと考えられる。そのため、複数の他者視点を取り込むことが困難となり、自己中心的な視点が優先されると推察した。

第4章では、自閉症児の自己理解を研究する意義を提示した上で、自己概念、自己評価、孤独感に関するこれまでの知見を整理した。そして、【研究4】自己の認知的側面から自閉症児の自己概念における発達の様相の検討、【研究5】自己の評価的側面から自閉症児の自己評価と孤独感の発達の变化的変化という2つの研究目的を示した。

第5章の第1節【研究4】では、自閉症をもつ小中学生を対象に、自己に関するインタビューを通して、対人的な自己に関する発達的变化について検討した。そこで得られた特徴は、低学年では対人的な自己への言及は7割の児童に見られるものの、その内容は規範的な価値判断によるものにとどまり、肯定的な側面に注目しているものが多かった。しかし、他者への理解が広がる高学年になると、「普通」「まあまあ」と自己の特徴を目立たせない発言をしたものが存在した。そして、中学生になると、対人的自己への言及は増加し、肯定・否定どちらかに偏るのではなく、両面から対人的な自己を捉える発言が増加したが、自己を統合的に捉えて表現した物は少なく、二分法的に自己を捉えた発言の増加が見られた。第2節【研究5】では、自己の評価的な側面である自己評価と孤独感に着目し、自閉症児と定型発達児の小中学生に質問紙を用いて検討した。その結果、先行研究同様に、自己評価については社会性領域で自閉症児の自己評価が定型発達児よりも低いことが示された。また、自閉症児の孤独感は、定型発達児よりも高いものの、その差は全年齢群で見られたのではなく、高学年以降強まることが示された。しかし、定型発達児は孤独感と社会的な自己評価に相関が見られたが、自閉症児にはそのような相関は認められなかった。よって、自閉症児の孤独感は、定型発達児とは異なる規定因を持つ可能性が推察された。

第6章では、第3章、及び第5章で行った研究から得られた知見を整理し、自閉症児が持つ自他理解の発達の様相について検討した。自閉症児の児童期前半は、万能感に満たされており、「根拠のないポジティブな評価」をする段階である。やがて9～10歳を越えて、命題的な理解によって、他者の心が理解できるようになっていく。これが他者と自分の違いへの気づきとなり、「普通」「まあまあ」というように、自分の自閉的特性が目立たないように、自己を表現するものも見られるようになる。また、この時期は、社会的な自己評価の低下や孤独感が強まりやすい時期である。自閉症児は、他者とのかかわりの中で、情動を伴う直観的理解も合わせて用いることはあるが、社会的刺激への情動反応や選択的注意の弱さといった特異性を持っているために、予想と異なる状況に出会うと、臨機応変に命題を修正することが難しく、当初の命題に固執しやすいことや、視点取得において自己中心的な視点で考える傾向が見られる。その結果、他者と情動的、認識的な理解のズレが生じることによって、社会的な失敗経験も重ねやすいことが影響しているのかもしれない。そして中学生になると、他者との相互作用なやり取りを通して、自己を捉える視点がもてるようになり、自己を肯定的・否定的両面から理解しようとする。ただし、統合的な視点をもつことは困難であるため、二分的な理解にとどまってしまうと考えられる。このような自閉症児の自他理解に対する支援方法として、①情動の共有経験を増やしていくこと、②命題的な理解によって他者中心的な視点の弱さを補うこと、③表面的な行動にとらわれず、内面に寄り添っていくことという3点を提案した。

以上より、本論文では、自閉症児の他者理解において、定型発達児と同様の直観的・命題的な心理化を用いて理解しようとするが、その機能に伴って起こる反応（行動）には違いが生じることが示された。また、自己理解については、他者理解の特異性の影響を受けながらも、他者との相互作用に関連付けた自己について捉えることができるようになっていく。今後は、他者理解について得られた知見から、支援のためのグループワークにつなげていくことや、孤独に対するポジティブな効果についても検討していきたいと考える。